

シーリ遺構から見る御内原のくらし

—平成 19 年度首里城跡御内原北地区発掘調査から—

The life of the Uuchibaru as seen from the Shiiri
- Excavation Research of the Northern Uuchibaru area, Shuri Castle site in 2007 fiscal year -

仲座 久宜
NAKAZA Hisayoshi

ABSTRACT : When the Shuri Castle was excavated during the 2007 fiscal year, a structure called the Shiiri was unearthed. It was made of stones and believed to have been used as a garbage dump. The feature yielded not only chinaware dating to the 17th century AD but also numerous ecofacts. From these data, it is possible to reconstruct past lifeways at the Uuchibaru. This paper attempts to reconstruct past lifeways at the site based on recovered materials and interviews with elder people who knew about the Shuri Castle in the early 1900s.

1. はじめに

平成 19 年度に実施した首里城跡発掘調査は、かつて御内原と称されていた正殿裏手の一角において、約 300 m²の範囲で調査を行い（第 1 図）、14 世紀後半から沖縄戦終結後（1950 年頃）までの 7 期に区分できる多様な遺構が検出されている。その中でも、17 世紀前半に位置付けているシーリ遺構は小規模な遺構ながらも、そこから出土した遺物の様相からは、御内原での生活を垣間見ることができる。

遺構が検出された地点は調査区の北東にあり（図版 1）、明治前～中期に引かれたとされる『沖縄県首里旧城図』（横内家資料・那覇市歴史博物館所蔵）を重ねると、女官居室の北側区画内南西隅にあたる（第 2 図）。しかし、シーリ遺構と関連する同時期の遺構は、沖縄戦及びその後の開発により破壊されたと見られ残存せず、周辺の建物との関係を知ることはできない。だが、現存する各種古絵図等から、遺構は 17 世紀段階で御内原内に所在していた可能性が高く、本稿では御内原と関連付けて論ずることとしたい。

なお、ここで言うシーリ遺構とは、生活ゴミを廃棄した穴を沖縄の方言で「シーリ」と称していることに由来させたもので、類例として那覇市壺屋古窯群において石組遺構（那覇市教委 1992）、竹富島カイジ浜貝塚からは石囲いの遺構（沖縄県教委 1994）として報告されている。ここでは本報告に先立ち、現時点で判明している遺物の種別及び各種記録をあわせ、御内原での生活について推測を交え復元してみたい。

2. 遺構・遺物の概要

遺構は天端石が破壊されているため、当初の規模を知ることはできないが、琉球石灰岩を円筒形に積み上げたもので、その外観から当初は井戸を想定し、円形石組み遺構と称して調査を開始した。残存部の口径は約 110 cm、底径約 90 cm、深さ約 60 cm を測る。遺構断面は逆台形を呈し、控えの長い人頭大の雑切石を側石として密に積み、最大 4 段が残る。その積み方からは、築造に際し側石を円筒形に施工後、底面として大小の礫を平坦に敷き詰める工程を読むことができる。

遺構内の調査は、南北位に断面観察用のベルトを設けて掘り下げを開始した。その後間もなく、内部に堆積する土は大きく上下 2 層に区分できることがわかってきた（図版 2）。上層は遺構廃棄後に堆積したと考

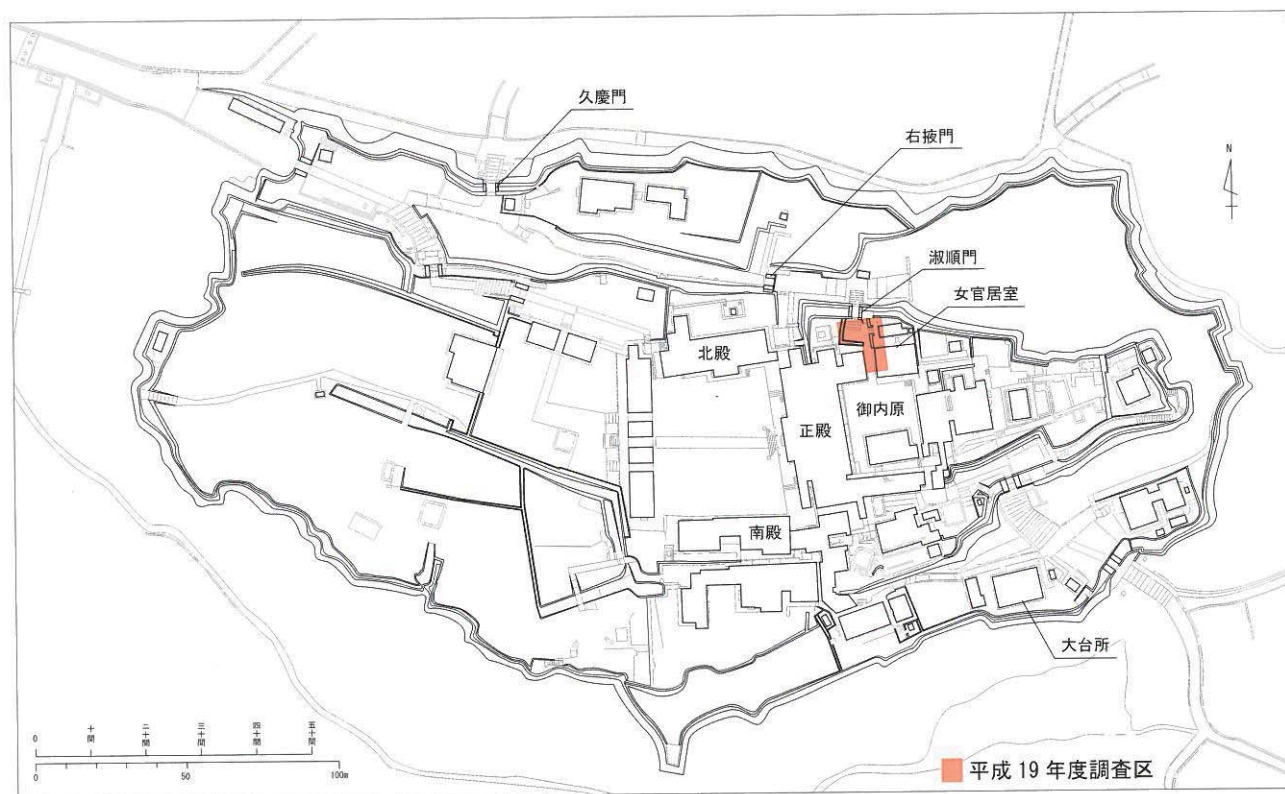
えられる木炭及び瓦類を多く含む密な粘土層、その下部は締まりのない腐葉土状の黒褐色土壌が主体で、多量の獣魚骨を含み、明らかに周辺の状況と異なる。この時点で、遺構は井戸でなく生活ゴミを廃棄したシーリの可能性が生じてきた。さらにこの断面観察用のベルトにおいて、土壌の堆積状況をつぶさに観察すると、遺構断面形状に沿うように、逆放物線状に幾重にも層を成すことがわかる（図版2）。この状況は、日々の廃棄物が堆積していく様子を現すとともに、これらが遺構上部まで溜まると、上から掻き出していたことが考えられる。また、遺構の断面形状が開口部で広がる逆台形であることも、掻き出しやすさを考慮したものと思われる（図版2・3）。

この遺構内の堆積土には、調査時では採取が困難な多くの微小遺物が含まれることから、詳細な分析を目的に、堆積土の全量にあたる土囊32点分を回収し、天日による乾燥・計量後、水洗により浮遊する遺物と5mm、2.5mm、1mmのふるいにかかる遺物を採取し、選別・分類・同定作業を行っているところである。

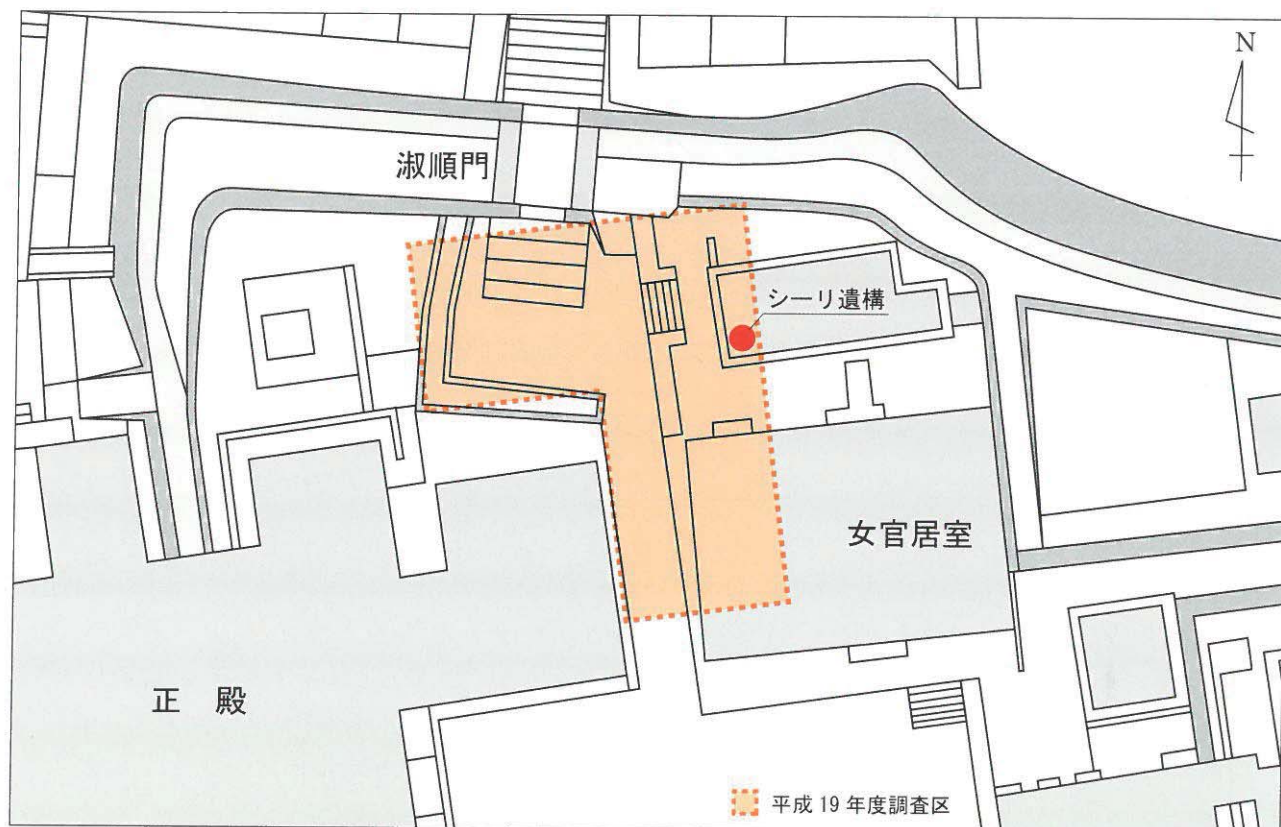
次に遺構内から得られた主な遺物を紹介する。人工遺物の量は自然遺物に比して少ないが、中国、タイ、関西、肥前、沖縄産の陶磁器類をはじめ、骨製品、キセル、木製品、銭貨、鉄釘等で構成されている。

自然遺物は数量・種類ともに多く、調査時には特に魚骨の多さで掘り下げが困難なほどであった。現時点で判明しているおもな種別を挙げると、脊椎動物骨では魚類、哺乳類、鳥類、爬虫類が得られているが、魚骨の量は群を抜いており、特に大型魚が顕著に見られる。哺乳類ではイヌ、シカ、ネズミが見え、鳥類はニワトリやカモの類、その他爬虫類としてヘビの骨も出土している。また、微小な昆虫類の体節部も多数出土しており、これはネズミと同様、生ゴミを目的として遺構内に侵入したものと考えられる。

貝類では、小型の巻貝カンギクや二枚貝のアラスジケマンガイが比較的多く得られ、その他数種が認められるが、貝種はある程度限定されているように見え、選択して入手していたことが窺える。自然遺物ではこれら動物遺体のほか、植物の種実類が多数含まれ、ヒトの歯や糞石も得られている。



第1図 首里城平面図及び調査区の位置（『沖縄県首里旧城図』横内家資料をトレース・加筆）



第2図 調査区拡大図（『沖縄県首里旧城図』横内家資料をトレース・加筆）



図版1 調査区全景（画像右手が北、シーリ遺構は中央やや右下）

3. 聞き取りによる御内原の生活

今回シーリ遺構を検出した御内原は、正殿の裏（東）側一帯を指す。このエリアは、国王及びその親族、国王に仕える女官にのみ立ち入りが許された場所である。特に王族以外の男子は立ち入りが厳しく制限され、違反した者には重い刑罰が科されたと伝わる（「御城内并諸座御蔵万事寄」『琉球資料』）。そのためか、御内原の様子を残した記録はほとんど見あたらず、謎を秘めた空間でもあった。

ここでの生活及び体制等については、昭和初期に首里第一国民学校の教員であった真栄平房敬氏が、かつての首里城御内原や中城御殿を知る古老から聞き取りを行い、その内容を綴った『首里城物語』（真栄平 1997）に詳しいため、本書から遺構・遺物に関連する箇所、特に食生活について抜粋して紹介したい。

「城内住込みであった御内原に仕える女性の食事は自弁で、1日約2合5勺を出仕日数分支給され、これらの米を出し合って共同炊飯していた。ランクが最下位の女官達は惣菜費を共同捻出したが、容易ではなかった。そこで炊飯係の“あがま”が国王の調理場である寄満や料理座をまわって鰹節や味噌、漬物をもらい惣菜にしていた」（真栄平 1997）。

このように、基本的に自費による女官達の食生活は質素なものであったが、「ウサンデーガナシと称する国王一家の日々の食事のお下がりや御寝廟殿の国王五位の月忌の霊供（供物）のお下がりなどが絶えずあるので、それを頂戴したという。また、寄満から上る公費による王妃・王婦人のメニューは大方かわり映えがしないものであったので、私費で好みにあった惣菜などを侍女につくらせ、寄満からの膳に加えたという。そのような時には余分につくらせ、侍女たちにも分け与えたという」（真栄平 1997）。

4. 出土遺物から見る御内原の生活

これまで記した出土資料や聞き取りによる状況を踏まえ、御内原における生活の一端を復元してみたい。人工遺物の中でも陶磁器に関しては、中国産染付碗、小碗、杯、瓶、タイ産陶器壺、合子のほか、関西系及び肥前陶磁や沖縄産陶器が含まれる。この中の一部では古手の資料が見られるものの、17世紀前半に比定できる資料が多勢を占めていることと、初期の沖縄産陶器と思われる製品が含まれていることから、遺構の年代は概ね17世紀前半以降に比定することが可能と考えており、この年代は調査直後に実施した出土炭化材の年代測定結果である 350 ± 26 (yrBP) とする数値とも概ね符合する（パリノ・サーヴェイ 2008）。

これらの陶磁器の中でも、沖縄産と思われる筒状を呈する器物及び、この製品の蓋と思われる円盤状の無釉陶器については、これまで例を見ないことから、その用途について伝世品を含め類例を求めたところ、茶道具として用いられる建水や水差しが浮上してきた。これと共に無釉の火炉片、中国産染付碗及び小碗も出土しており、これらの組み合わせから茶の湯を含めた喫茶の風習を想起することができる。そのほか、キセルや小杯の出土により、喫煙や飲酒の習慣が存在したことも考えられ、女官たちの優雅な生活を偲ばせる。

人工遺物では上記した陶磁器類のほかに、ガラス製ビーズ、木材が付着した状態の鉄釘、調度品の装飾用と考えられる朱が付着する骨製品も出土しており、これらを用いたアクセサリーのほか、加飾された何らかの木製品、あるいは調度品が存在していたことがわかる。

ここで再び真栄平氏による聞き書きに戻ると、「御内原に仕える女性の衣生活はぜいたくであった。容姿を重視する御内原の面目に係ることもあって、衣は度々賞賜や寵賜の名のもとに支給された」（真栄平 1997）とあり、出土した茶道具や喫煙具等がその一環で支給されたことも想像に難くない。

前記した聞き書きから、御内原には王妃から女官までの様々な役職を持つ女性が、琉球処分当時（1879年）に常時70人ほどくらしており、その多数を占める下級女官たちは質素な食生活をしていただとされる。しかし、今回検出したシーリ遺構からは、多種多様な遺物が出土しており、その内容からは、さほど質素さを感じさせない。しかしながら聞き書きにもあるように、国王・王妃のおこぼれや、様々な祭祀・行事の供物が、女



図版 2 遺構内堆積状況



図版 3 遺構完掘状況



図版 4 出土した糞石

官たちにお下がりとして分け与えられていたことが事実とすれば、シーリ遺構から検出された高級食材と思われる自然遺物の存在もうなずける。

これと関連して、御内原にクラス女官たちの食事は、「かまい」という城外の施設で準備されていたが1729年に廃止され（『混効験集』1711年）、以降は南側外郭内の「大台所」で調理していたとされる（『琉球国旧記』1731年）。いずれにせよ、そこからシーリ遺構までの距離や動線から、遺構内の廃棄物は調理時のものとは考え難い（第1図）。この点及び遺構から出土している遺物の種別や傾向から、シーリ遺構は日常生活、特に食後の廃棄物を中心に投棄した遺構であることが考えられ、食材の中でも魚類を多用していたことが見える。魚類の種別としては、フエフキダイ科が最も多く、クロダイ属、ベラ科、ブダイ科といった大型近海魚の存在が際立つほか、わずかにサバ科（カツオ類）らしき回遊魚も含まれる。

また出土は少量ながら、骨の表面に解体時の刃物痕が残るため、イヌやシカも食していたようである。今回出土したシカ骨に関しては、日本各地に分布するニホンジカの骨格標本と比較観察を行った結果、相対的に島嶼化（矮小化）している点及び、その他の形質・形態的特徴から、ニホンジカの地域亜種として屋久島に分布するヤクシカに近似する傾向にあるという（菅原 2009）。

ちなみに、現在も慶良間諸島に生息しているケラマジカが、外部からの移入により繁殖したことは著名であるが、現時点でその公式な記録として有力なのが、『琉球国由来記』（1713年編集）による「崇禎年間（1628～1644年）に金武王子朝貞が薩摩よりシカを持ち帰り慶良間諸島の古場島（久場島）へ放した」とする記載であり、これが現生のケラマジカの由来になることが考えられる。（城間 1999, 2002）。

なお、シカ肉は冊封使を歓待する御冠船料理の食材として『琉球冠船記録』（1866年）にも見え（金城 1993）、その目的で薩摩からシカを移入し、飼育した可能性が指摘されている（城間 2002）。このような特別な食材といえるシカがシーリ遺構内から検出されていることは、前記した聞き書きから見える様々な行事等の供物同様に、御冠船料理からも女官たちへのお下がりが存在したことを示唆しており興味深い。

首里城では、過去に行われた発掘調査においても、自然遺物にシカ骨を含む事例が複数見られることから、今後はこれらの形質的特徴を調べることはもとより、共伴遺物及び文献史料との対比も行い、より詳細なシカの移入時期及びルート、祭祀・行事との関連についても解明していく作業が必要となろう。

その他の自然遺物として、種実類及びヒトの遊離歯と糞石が得られている。種実類はイネ、マメ、ラリ科が得られており、特にラリ科のメロン類が多い（パリノ・サーヴェイ 2008）。次に歯は少なくとも7点が得られており、3点が永久歯で4点は乳歯であった。この内、永久歯及び乳歯の各1点で深い虫歯の痕跡が認められる。また、乳歯には歯根が見られず内部が空洞化していることから、永久歯に生え替わる際に自然脱落したものと思われる。このことから、ヒトの換歯年齢とされる7歳前後の子どもが城内で生活していたことが想定できる。この状況から、御内原の人々は虫歯になると城内で抜歯するなどの処置を行い、抜歯後は乳歯も含め、シーリ内に廃棄していたという側面も見えてきた。糞石については次項で触れることにする。

5. 首里城のトイレ

首里城跡では、これまでの発掘調査において多くの遺構が検出されている中、トイレの可能性のある遺構の検出を見ていない。果たして首里城のトイレはどこに存在していたのだろうか。

シーリ遺構内には、土の塊のような性格が判然としない遺物が多数含まれていた。この遺物は、腐葉土状の堆積土中に、どこかで見覚えのあるほぼ規格的な形状・サイズで含まれることから、もしやと思い糞石の可能性を視野に入れて慎重に取り上げを行ってきた。ちなみに糞石とは、ヒトを含む動物の糞が化石化したもので、一定の条件が揃った環境でのみ長期間遺存するとされる（図版4）。シーリ遺構内の糞石が遺存したのは、遺構石組みが精緻に積まれていたこと及び、遺構上層の粘質土が蓋の役割を果たし、内部が密閉さ

れたことによるとと思われる（図版2・3）。

その後、この糞石と思われる資料の成分及び内容物の分析を行った結果、ヒトを宿主とする回虫及び、鞭虫の寄生虫卵が高い密度で確認されたことから、ヒトの糞石である可能性が高いとする結果が得られている（パリノ・サーヴェイ 2008）。これにより、当時の人々は人糞を肥料として栽培した野菜や野草を、生の状態か十分に火を通さない不完全調理の状態で食していたか、寄生虫を含んだ水を摂取していたことが考えられる（金原 1996）。また、糞石からはイネ科、アブラナ科、アカザ科、ヨモギ属の花粉も検出しており（パリノ・サーヴェイ 2008）、今後はこれらの分析結果及び共伴する種実遺体ともあわせて、食用植物あるいは一帯の植物相・植生についても考えてみたい。

このシーリ遺構は、出土する遺物の状況や組成から、おもに生活ゴミを廃棄した遺構であることは既述したが、そこに糞石が多く含まれているのは、当時のトイレに関する習俗を現していると言えよう。たとえば、御内原にくらす人々が、今でいう「おまる」のような移動式の容器に排泄し、シーリ遺構まで運搬・廃棄したことが考えられるのである。しかも、それはシーリ遺構内堆積土中にコンスタントに見られることから、恒常的に行われていたことがわかる。

御内原には常時 70 人ほどの女官が住み込みで生活していたとされる。そのため、日常生活から生ずるこれらの廃棄物は日々増え続けるものであり、冒頭で示したように、遺構内の堆積状況に繰り返し掻き出した痕跡が見られるのは、第一に廃棄スペースを確保する目的が考えられる。

次に、この掻き出した廃棄物の行方として、当初は出土した糞石から寄生虫卵が検出されたことにより、城内の菜園のような場所に施肥した可能性を考えた。しかし、堆積土中には動物骨や陶磁器類の含有率が極めて高いことから施肥には適さないことが考えられる。さらに廃棄された生ゴミや糞尿は、一帯に異臭を放つうえ、病原菌等による汚染を生むことが想像でき、その衛生面からも城外へ搬出していたことが推測できる。遺構が位置的に御内原から北側外郭への往来が可能な淑順門と近接していることも、淑順門から北側外郭、右掖門を経て、スロープを下り久慶門から城外へ持ち出していた動線が連想でき、この選地は処理作業を効率化した結果とみなせよう（第 1・2 図）。

これらに関連する記録として、沖縄県立博物館・美術館が所蔵する『冠船之時御座構之図』及び『冠船之時御道具之図』（1866 年製作）が参考になる。この絵図には、中国からの使節である冊封使を迎え、もてなすために必要な道具・調度品類やそれらをレイアウトした平面図が描かれている。『冠船之時御座構之図』においては、城内各所に「雪隠所」あるいは「休息所」とする区画が設けられ、屏風で仕切られたその一角には、小便筒として「○」、糞箱として「□」の記号で排泄に関わる 2 種の容器が認められる。また、『冠船之時御道具之図』では、この小便筒及び糞箱が拡大され詳細に図解されている。ただし冊封使は男性で構成されているため、これらは男性用と見てよいが、このような器物の存在は、トイレが構築物として存在しなかった可能性を示している。

この絵図資料に見える状況からも、当時の排泄は室内の一角を屏風等により間仕切りをした上で、これらの専用容器に行い、その都度シーリ遺構のような場所に廃棄していたことが想定できるのである。

6. シーリ遺構の廃棄年代

シーリ遺構内堆積土の上層には多量の木炭及び瓦が含まれ、その範囲は遺構外にも及ぶ（図版 2）。これらは火災により焼け落ちた瓦礫が堆積したものと考えられ、この火災がシーリ遺構及びこれを擁する建物が廃棄される要因になったことが想定できる。首里城正殿は記録上、数回にわたり火災・再建を繰り返しており、火災時には正殿に近接する女官居室をはじめとする周辺の建造物にも延焼したことが想定できる。この類推から遺構が存続・廃棄された年代を割り出してみたい。

まず、史実上の首里城正殿の火災を挙げると、1453 年（『李朝実録』）、1459 年（『明実録』）、1660 年（『球陽』）、1709 年（『球陽』）のほか、1945 年の沖縄戦での消失がある。対象となるシーリ遺構から出土している遺物の年代は 17 世紀前半であることから、この年代以降の火災年代を抽出してみると、1660 年及び 1709 年の火災が浮かび上がる。さらに年代を絞り込むため、遺構に含まれる遺物の組成を加味すると、近世期の首里城の瓦葺きは『球陽』による 1670 年からであり、この年代が事実であれば、シーリ遺構内上層に多量の明朝系灰瓦が含まれることで、遺構が廃棄された時期は、首里城の瓦葺き以降である 1709 年の火災が原因であった可能性が高くなる。これにより、シーリ遺構は 17 世紀前半を中心として、18 世紀初頭まで存続した遺構であることが考えられる。

7. おわりに

以上、シーリ遺構から見える御内原の生活について、遺構の形状や内部の堆積状況、出土遺物、聞き書き等の情報を基に一部復元を試みた。この中でも特に自然遺物については量的に多く、その種類も多岐にわたることから、今後も継続して詳細な整理・分析を行うことにしており、その結果から、より具体的な食生活をはじめとする生活形態、自然環境等が見えてくるものと思われる。

しかし、このシーリ遺構に関しては未だ検出事例が少なく今後の資料増加を期待したいが、生活ゴミを廃棄するという遺構の機能からすると、特に建物が密集する都市部や、首里城のような大規模な廃棄場の確保が困難な場所においては不可欠なものと言えよう。また、現在に至るまでシーリという呼称が残る事実からも、その存在は近代以降も続くと思われ、並行して文献記録や民俗事例、聞き取りによる情報収集も行い、遺構の性格をより明確にしていく必要がある。

（なかざ ひさよし：調査班 主任）

<謝辞>

本稿を執筆するにあたり、陶磁器の分析では大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）、堀内秀樹氏（東京大学埋蔵文化財調査室）、動物骨をはじめとする自然遺物の分析に際して菅原広史氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）にお願いした。また、出土遊離歯の所見を竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）にいただいた。その他ご協力いただいた多くの皆様に、末筆ながら記して感謝の意を表します。

【引用・参考文献】

- 沖縄県教育委員会 1994『沖縄県文化財調査報告書第 115 集 竹富島カイジ浜貝塚—竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県教育委員会
- 金城須美子 1993「御冠船料理にみる中国食文化の影響」『第 4 回琉中歴史関係国際学術会議 琉中歴史関係論文集』琉球中国関係国際学術会議
- 金原正明 1996「稲作とともに拡大した病気」『季刊考古学』No. 56 雄山閣出版
- 城間恒宏 1999「戦前の史料にみるケラマジカの記述」『史料編集室紀要 第 24 号』沖縄県教育委員会
- 城間恒宏 2002「ケラマジカの由来に関する若干の考察」『史料編集室紀要 第 27 号』沖縄県教育委員会
- 菅原広史 2009「首里城および周辺遺跡出土のシカに関する考察」『沖縄埋文研究 6』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 那覇市教育委員会 1992『那覇市文化財調査報告第 23 集 壺屋古窯群 I—個人住宅建設工事に伴う発掘調査—』那覇市教育委員会
- パリノ・サーヴェイ 2008「首里城跡出土遺物の自然化学分析報告」パリノ・サーヴェイ株式会社
- 真栄平房敬 1997『首里城物語』おきなわ文庫 48 ひるぎ社